読書感想文の手びき

——書きたいことを明確に把握させて書かせるための工夫——

深川賢郎

はじめに

作文を書き悩む生徒には、よく見るといくつかの原因が重なっている。ここでは、書きたいことがある程度ありながら、書き表わす手順がわからないために、書き悩んでいる生徒への手だてをまとめてみたい。この報告は、昭和五十二年度夏休み読書感想文の書き方の手びきと、その改訂としての昭和五十三年度夏休み読書感想文の書き方を指向しての教室における実践のまとめである。

一

昭和五十二年度夏休み読書感想文の手びきの内容は、つぎのような項目から成っている。「・夏休みに読んでみたい本（読みたい本のリスト記入らん）・夏休み読書感想文課題図書（書名・著者名・簡単な解説）三〇冊の紹介——図書館と連携してリストを作る。

一、本の選びかた
　1、自分の力で読みこなせそうなもの
　2、情報の求めかた（あらかじめその本について知る方法）
二、本の読みかた
　1、書きこみ
　2、正確・公平なよみ
　3、深いよみ
　4、反論・批判・疑問・同感・共鳴のメモ
　5、資料を求める
三、読書のメモ
　あらすじ・主題・意見感想
四、考え（感想）のまとめかた
　1、本に述べられている事実と自分の考えを大切に
　2、心に残ったことに対して、考える材料を集める
　3、「私」とのかかわりを大切に
　4、自分のテーマは、ア解決を求めることか、イ自己の発露として出すのか、ウ他者への働きかけ、提案をするのか、などの立場から、ねらいをしぼっていく。
五、構想について
　1、段落のある文章
　2、段落のつなぎかた
六、文章構成の例（三例）
七、書き出しについて
　1、結論から（例文）——以下いずれも省略

2、全体の印象から（例文）
3、主人公の紹介から（例文）
4、一般論の引用から（例文）
5、本文の引用から（例文）
6、本論にズバリ入るやり方（例文）
八、語・文について
1、わかりやすい語句を使うこと
2、文の吟味（一文の長さ・修飾など）
九、チェックポイント（自己点検）
1、意欲・心がまえはよいか
2、本のえらびかたはよいか
3、本のよみかたはよいか
4、書きたいことはあるのか
5、どういう事実を扱うのか
6、どう反応するのか
7、何を訴えるのか　8、アウトラインはいいか
9、文章表現はいいか
10、表記・記号の使い方はいいか
11、全体のまとまり・迫力はあるか
十、評価の観点
1、本のえらびかた
2、本のよみかた
3、資料の使いかた
4、訴えたい内容
5、表記
6、ことば使い
7、文章構成
8、全体の迫力
十一、読書感想文の例文（省略）

以上十二ページの冊子とした。読書感想文を書くのに必要な事項を一応整理できたと考えていた。

二

上記の手びきを使って感想文を書いた生徒（一年生）の反応が同僚の伊藤孝教諭によってまとめられた。

成績（五段階）	学習効果	推薦作業	感想文
2			C
3		C	C
4	A	C	C
3	A	A	C
3	A		C
3	A	A	C
4	A	A	C
2	A	A	C
4	A	A	C
4	A	A	C
3	A	A	C
3	A	A	C
2	A	A	C
4	A	A	C
5	A		C
5	A		C
3	A		C
4	A		C
3	A		C
3	A		C
3	A		C
4	A		C
5	A	A	C
3	A	A	C
3	A	A	C
4	A	A	C
4	A	A	C
5	A	A	C
3	A	A	C
2	A	A	C
3	A	A	C
5	A	A	C
5	A	A	C
2	A	A	C
4	A	A	C
2	A	A	C
4	A	A	C
3	A	A	C
4	A	A	C
3	A	A	C
3	A	A	C
4	A	A	C
評価 0	59	41	
41	41	50	
59	0	9	

<表6>

男女別	班別	生徒番号	自感銘度
男生徒	1	1	A
		2	
		3	
		4	
	2	5	A
		6	A
		7	A
		8	A
	3	9	A
		10	
	4	11	A
		12	
		13	A
	5	14	A
		15	A
		16	
	6	17	
		18	A
		19	
	7	20	
		21	A
		22	
女生徒	1	23	A
		24	A
		25	A
	2	26	
		27	A
		28	A
	3	29	A
		30	
		31	A
	4	32	A
		33	
		34	A
	5	35	A
		36	A
		37	
	6	38	
		39	
		40	A
		41	A
		42	A
	7	43	A
		44	A
		45	

集計(%)		
	A	59
	B	41
	C	0

『〈表6〉が示すように、自分の選択した図書からの感銘[A]度は極めて高い（Aが多い）にもかかわらず感想文が充分に書けなかった（Cが多い）という生徒（AC型）が十六名（36％）もおり、全体の傾向としては、感銘度A59％、感想文C59％と、ちょうど対照的な形になっている。この点について、生徒の中には、「今まで[B]あまり書いたことがなく、すぐ書くことが無くなって五枚書くのに苦労した」[C]「読んだ時のすなおな感想がうまく表わせず、きれいごとを並べたようになった」など、資料の集め方の不手際や、経験不足で自分の気持を文章化できないもどかしさを述べている者がいる。視点の定め方・構想の立て方に関する問題についても、「考え[D]方がいろんな方向へ発展していてまとまりがない。精一杯書いてかえって混乱した」[E]「もっとじっくり読んで、自分の考えを系統だてて書くべきだ。もう一度読みなおして書いてみたい」などと述べている。

一方で、「あの十数枚のプリントのおかげで感想文の書き方がわ[G]かったような気がする」とか、「この学習で文章の構成法がわかった。「一番よく身についたのは感想文の書き方だ。みんなのは、いろんな本や著者などについて調べたりしている。その作品の書かれた時代・社会のしくみなどを理解する必要もある」などという記述もあるが、総じて、学習目標の達成には程遠い取り組みに終ったということができる。』（〈表6〉と文章はともに「研究紀要」第三号〈広島県立安古市高等学校刊〉より。傍線は引用者による。）

伊藤報告は、昭和五十二年度の読書感想文の手びきが、十分な効果を発揮できなかったことを如実に示している。その原因として考えられることは、①夏休み前、手びきについて教室で十分触れることができなかった。ある教室では、冊子を配布しただけに終った。②「書きたいことが十分書きあらわせなかった」というAC型があくまで自己評価によったものだということもあろう。しかし、いずれにせよ、惨憺たる結果であることにはまちがいない。

三

上記伊藤報告に指摘されている問題点の考察をしてみたい。

ア、傍線A「感銘度は極めて高いにもかかわらず、感想文が十分

書けなかった」という感想は、以下の傍線部B、C、D、Eに原因している点が充分に考えられる。

イ、傍線B、Cは、今考察しようとしている「手びき」の内容とは一応切りはなして考えてみる方がよいであろう。

ウ、傍線D「考え方がいろんな方向へ発展していてまとまりがない。精一杯書いてかえって混乱した」については、

(原因) a主題の焦点化がなされていない。

(対策) ↓何を書きたいかを見究めてから書かせる。

(原因) b思考、着想の定着化がなされていない。

(対策) ↓メモ、カードなどによってポイントを定着させる。

エ、傍線E「もっとじっくり読んで、自分の考えを系統だてて書くべきだ。もう一度読みなおして書いてみたい」について、

(原因) a構想・文章構成が十分なされていない。

(対策) ↓全体の文章構成の型を示し、作業の手順を示す。

↓右のことによって構想を誘導し、思考（文章）の展開に系統性をもたせる。

(原因) b読みが、自分とのかかわりにおいて十分に深められていない。

(対策) ↓本の内容と自分のおもいを明確に区別して認識させる。

↓読み深めざるを得ないように、手びきを具体的に示す。

つぎに、上記以外の点で昭和五十二年度読書感想文の手びきの持っている問題点として、つぎのようなものが考えられる。

ア、手びきは生徒の実態に即し、生徒が最も困る部分にかかわるものでなければならない。

(対策) ↓手びきを精選する。

↓必要な部分をくわしくする。

イ、問題は手びきの四・五・六にあったと考えられる。

(原因) a「四、考えのまとめかた」の項が不十分であった。

(対策) ↓本の内容と読み手とのかかわりが明確に操作できるようにする。

(原因) b「五、構想について」の項が不充分であった。

(対策) ↓考えの深めかた、手順を示す。

(原因) c「六、文章構成の例」の項が不十分であった。

(対策) ↓単なる例示にとどまらず、上記四・五との連携を考慮する必要がある。

以上のことを整理してみるとつぎのようになる。これは、改訂の着眼点であると同時に、新しい読書感想文の手びきの仮説である。

ア、読書感想文に必要な要素を示し、本の内容、読む前の自分、読んだあとの自分を明確に把握させる。

イ、書き手の考えを整理し、主題に向かって焦点化するために、自分の内にある渾沌を秩序づけるよう、手がかりや手順を示す。

ウ、読みを確かにするために、カードに抜き書きをし、本のどの部分にかかわって自分の感想が生まれているかを明確に把握させる。

エ、カードを操作しながら、読み取ったものをまとめさせる。

オ、読む前の自分を確かめさせ、その本に接して自分がどう変容したかを明確にさせる。

カ、渾沌としている想念を定着させ、整理し、順序づけるためにカードを使用させる。

キ、全体を三つの段とし、上記アの要素をおさえさせる。

ク、それぞれの段を一文で表現させ、文章全体も一文で述べさせることによって、述べたいことの中心を確かにして書かせる。

ケ、文章構成のわかるような記入用紙を用意し、それに従って仕上げをさせる。

コ、評価の規準を示す。

四

読書感想文の手びきの改訂を求めて――「山月記」中島敦著――の感想を書く。

授業の経過

1、「山月記」の読解（6時間）

課題プリントによって、つぎの点をおさえる。○李徴の人間性○生活行動とその結果　○李徴の身の上話、運命、不条理　○詩について○尊大な羞恥心と臆病な自尊心　○自己喪失　○虎への変身

2、「考えをまとめる」を読む（1時間）

教科書「現代国語2」筑摩に所収の「カードを使って考えをまとめる方法」（梅棹忠夫）を読む。ポイントの指摘をする。

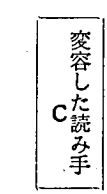
3、感想文を書く（5時間）

前節三において考察した観点により、読書感想文の手びきを作成、生徒に示す。（資料1）生徒はこの手びきにしたがって自分のペースで文章を書きすすめる。

（資料1）

「山月記」を読んで――感想文を書く――

一、読書感想文の要素



Aどんな内容に、Bどんな自分が触れて、Cどう変容したかが大切である。

二、文章構成の要素

▽文章全体の主題の明示

▽第一段　本の内容

▽第二段　読む前の自分・旧い自分

▽第三段　変容した自分

▽しめくくり

三、主題を求めて（何を書くかを考える）

1、この作品を読んで、印象に残ったこと、考えさせられたことを三つにしぼって、つぎの中から選びなさい。

(1)人間が虎になるということ
(2)李徴の性格・人間性
(3)虎とは何か
(4)仲間と孤独
(5)鬼才と鈍才
(6)李徴の臆病
(7)愛と詩人の真実
(8)栄光と敗退
(9)性格による悲劇
(10)人間存在の不条理
(11)人間と運命
(12)その他（　　）

2、選んだ三つの点について、自分の書こうとすることを、それぞ

れ一文で表わしなさい。（記入らん省略）

3. 右の三つの中から、

(1)平素から深く関心のあるもの

(2)体験のあるもの

(3)強く興味をおぼえるもの

(4)述べたいことが多くあるもの

という観点から一つだけ選びなさい。

（記入らん省略）

四、読み取ったもののまとめ

1. 上記二の3で選んだ主題に添って、読み取った内容（必要な部分）をカードに抜き出しなさい。

2. カードを取捨選択し、読み取った内容をカードを引用しながら5〜10の文でまとめなさい。（記入らん省略）

五、「山月記」を読む前の（旧い）自分の考え方を2〜5の文でまとめなさい。（記入らん省略）

六、新しい（変容した）自分

1. 作品に触れて、自分の考え方、ものの見方がこうかわって来た、こんなことがわかったといった点について、思いつくままにカードに書き出しなさい。

2. カードを整理し、変容した自分を一文で述べなさい。ここの一文は、はじめの主題とかさなってもよい。（記入らん省略）

3. 右の中心文をもとに、その内容を拡充する文を、カードを整理しながら、5〜10文で書きなさい。拡充とは、中心文をよりくわしく、より正確にすること。

（記入らん省略）

七、各段の中心文の書き方

▽主題明示のキー

a、私はこの本の中に——を発見した。

b、私はこの本の——にうたれた。

c、私はこの本から——を学んだ。

d、私はこの本によって——を考えさせられた。

e、この本の（　）は——である。

f（　　）

▽第一段（内容）のキー

a、この本には、まず第一に——がある。

b、筆者は——と述べている。

c、この本の世界は——である。

d、主人公（人）——は（所）——で——している。

e、（　　）

▽第二段（旧い自分）のキー

a、——のことについて私は——であった。

b、本来私は——という考えを持っていた。

c、私の——は——であった。

d、——ということは私の信念であった。

e、（　　）

▽第三段（新しい自分）のキー

a、——を読んで私は——になった。

b、——を読んで私は——しようと思う。

c、——によって私は——と考えるようになった。

d、——に対して私は——といいたい。

e、（　　）

▽しめくくりのキー

a、以上述べたように――。

b、このように考えてみると――。

c、だから（やはり、つまり、結局）――。

d、（　　）

八、例文（要素を一文で表現したばあい）

㋑私は李徴の生き方の中に、自己喪失の恐ろしさを見た。

㋺主人公李徴は狂疾のため異類の身となっていく。その恐ろしさと孤独を悲痛な声で哀惨に訴えている。

㋩私はこれまで、自分が発狂し自己を失ってしまったらどんなに気楽だろうと考えたことがある。

㋥いま李徴の血の出るような声をきき、人間が自己を失って狂気の世界に入ることが、どんなに恐ろしいことかを考えるようになった。

㋭つまり、甘い空想としては、死の世界、発狂の世界を考えることができても、現実に自分が自分でなくなるということは限りない不安や恐怖をおぼえさせる。

五

（記入様式および生徒作品（「」内）例）

題『山月記』を読んで二年　女子

A、全体のキー

「私はこの本の中で、運命という巨大な力の中で自分を見つめることの重要さを感じさせられた。」

B、一段のキー

「主人公李徴は、初め自分が異類の身になったことを運命としていたが、そのうちその原因は自分にあったともいえると言った。そういう中でやっと人間らしさを見つけた。」

C「初め李徴は異類の身となった自分の中にわけもわからず押しつける運命という力に完伏し、人間存在の不条理を見ていた。しかし、故人哀惨と語っているうちに、自分の昔の性格の中に虎に似たものを見つけていた。そして、そういう生活を送っていたから、異類の身になったのだと言い出した。自分の姿を見つめた李徴は、自分の愛のなかった人間の日日を考えた。そしてその時、妻を想い、子を想い、故人哀惨を想った。虎となって人間の心を忘れる寸前、李徴は人間に大切な愛、やさしさの重要さを知ったのだ。」

D、二段のキー

「私は李徴のいっていた、理由もわからないものを受け取らされるとなげいていた姿に共感し、それはあたりまえのことだとしていた。」

E、「理由のわからないもの、運命の力の大きさというか、そういうものに対して、私は、ただ見ているだけであった。自分の思いどおりに行かなかったら、それはすべて時の流れの運命的なものだと考えることしかできなくて、そこからは、あきらめるという結果しか生まれてこなかった。」

F、三段のキー

「李徴が昔の自分を見つめている姿によって、私は、運命の輪をどこかでまわしているのは、結局は自分の性格その他であると考えるようになった。」

G、「李徴が、自分の運命に思いあたることがあるといいだし、自

分の昔の姿を語った。愛のない生活を見つけた李徴は、それが異類の身となった原因だとした。その時私は、運命、運命といって逃げてみてもやはり自分に欠けていたところからいろんなことが起こるのだとわかった。そしてそれを自分自身でさがし出し、直していかなければ、運命の輪は悪い方へ悪い方へと傾いていってしまう。自分自身を見つめることがはやいほどいい。おそければ李徴のように、たとえ、愛を知ってももうすでに異類の身となっていて、どうにもならない。虎になるというのことは大げさだが、（こういったことは）私たちの実生活にもあるのではないだろうか。自分を見つめることをおこたって不運な日々を送って気付いた時にはおそかったと——。運命の力は大きいけどそれをどっちに向けるかは自分を見つめることが大事であろう。」

H、しめくくり

「このように考えてみると、やはり運命の力は大きいが、その中で自分を見つめ考えていくと、運命というものは少しずつでも自分のものになるものである。」

評価の観点

1. Aは以下の文章の主題文となり得ているか。
2. BDFはそれぞれの段の主題文となり得ているか。
3. CEGはそれぞれの段の主題文を拡充しているか。
4. A～Hまでの流れに統一性があるか。
5. 全体として訴える力はあるか。
6. 文章構成上、読書感想文の三つの要素がふまえられているか。

得点	46

				良 5	普 3	不 1
1		A		○		
2		B		○		
		D			○	
		F		○		
3		C		○		
		E			○	
		G		○		
4				○		
5				○		
6				○		
計				40	6	

六

生徒作品に見る結果——授業者による評価の一覧表——（この表は前節の評価の観点によって、一クラスの作品を評価したもの。○は5点、△は3点、×は1点としている。なお前節の作品例と評価はこの表の36番の生徒のものである。）

項目＼生徒		1	2	3	4	5	6
1	A	○	○	○	○	○	○
2	B	△	○	○	○	○	○
	D	○	○	○	△	△	○
	F	○	△	○	△	△	○
3	C	△	△	△	○	○	○
	E	△	○	○	○	○	○
	G	○	○	△	×	△	△
4		△	○	○	○	○	○
5		△	○	△	△	△	△
6		○	○	△	○	○	○
計		40	46	41	43	42	46

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
△	△	△	○	○	△	○	△	○	△	○	○	○	○	○	○	×	△	△
○	△	△	○	○	△	○	○	△	△	○	○	△	△	○	○	△	△	△
○	×	×	○	○	△	○	○	○	×	○	○	△	△	×	○	○	×	△
×	△	×	○	○	△	○	○	○	×	×	○	△	△	○	△	○	×	△
○	△	△	△	△	△	△	○	○	△	○	△	△	○	○	△	△	△	△
△	△	△	△	△	△	△	○	△	△	△	△	△	△	○	△	△	△	△
△	×	×	△	△	△	△	○	△	△	△	○	△	△	○	△	△	△	△
△	△	△	○	○	○	○	○	○	△	×	○	○	○	○	○	○	○	△
△	×	×	△	△	△	△	○	△	×	△	○	△	△	○	△	×	△	△
△	×	×	○	△	○	○	○	○	×	×	○	△	○	×	○	△	×	○
34	22	20	42	40	34	42	48	42	22	32	46	34	38	42	40	32	26	32

44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26
○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	×	○	△	○	△	△	△	○
○	○	○	○	○	○	×	△	○	○	○	△	○	×	○	○	○	○	○
○	○	×	○	○	○	△	○	△	○	○	×	×	×	×	○	○	○	×
△	○	○	△	△	○	△	△	○	○	○	×	○	×	○	○	○	×	△
○	△	○	×	○	○	○	×	○	△	△	△	○	△	△	○	△	○	×
○	△	△	△	△	△	○	△	△	△	○	△	△	△	○	○	△	△	△
×	△	△	○	×	△	○	△	○	△	×	△	○	△	○	△	△	×	△
△	△	△	○	○	○	○	△	○	○	○	×	○	△	×	○	×	×	△
△	△	△	△	○	△	○	△	○	△	×	×	○	△	○	△	△	△	△
○	○	×	△	○	○	○	△	○	○	○	△	×	×	○	△	△	△	×
40	40	34	38	36	44	41	32	46	42	40	20	40	22	40	42	34	30	28

計		
×	△	○
2	13	29
2	13	29
11	7	26
8	13	23
3	23	18
0	33	11
7	27	10
5	12	27
6	29	9
10	11	23
平　均		
36.7		

評価項目と観点

1、Aは全体の主題文となり得ているか、
2、BDFはそれぞれの段の主題文となり得ているか、
3、CEGはそれぞれの段の主題文を拡充しているか、
4、全体の流れに統一性があるか、
5、全体として訴える力があるか、
6、文章構成上の三要素はふまえられているか、

七

評価一覧表の考察

∧主題文について∨

1、主題文ABはよい成果を収めている。

2、主題文Dは×印が11あって問題を残している。

この点は「アンケートによる生徒の反応（後出）6」と一致している。

↓○読むことと書くことの連携が不十分であった。

↓○「文章の型」の使いあやまりがあった。

3、主題文Fは△印13で不十分であった。

↓○主題文の手引きが不十分？

↓○生徒の考え抜く力、整理する力、整理する力が不十分であった？

4、総合的にみて、主題文の手びきをあらかじめ用意しておくことは、段落においても、文章全体においても内容を深めたり整理したりするのに有効であると考えられる。

∧段落の拡充について∨

5、拡充のCEGとも△がそれぞれ23・33・27と多い。これは根拠を示すことが不十分なためである。

↓○発言の根拠や資料の裏づけを利用する学習（訓練）が必要である。

∧カードの使用について∨

6、想念の定着や資料あつめにカードを使用することは有効であると考えられる。

↓○上記5がうまくいっていないのは、カードの利用法をもっと早い時期に習得させておいて、カードが自在に利用できる練習をすることに欠けていたためと思われる。

∧その他∨

7、「全体の統一性（文章構成）」はまずまずよくいっている。

8、全体の訴える力（迫力）」は△29で不十分である。これは「型」にとじこめて「書き方の技術」「型の習得」をめざしたためある程度やむを得ないとも考えられる。

八

アンケートによる生徒の反応。これは、作文の手びきがどの程度活用されたかについて利用者の声をまとめたものである。

1、「山月記」を読んで感じるところ、考えるところがありましたか。

Aハイ24　Bヤヤハイ2　Cイイエ1　D無答16

2、三「主題を求めて」1〜12を利用しましたか。

Aハイ31　Bイイエ1　C参考とした12

3、三の2…それぞれ一文で……という作業は自分の考え方を方向づける意味を持っていましたか。

Aハイ31　Bイイエ10

また、一文とするとき「主題明示のキー」を使いましたか。

Aハイ29　Bイイエ13

4、カードの作業について

aねらいは理解できていましたか。

Aハイ10　Bヤヤハイ23　Cイイエ18

cカードは何枚書きましたか。

5枚1　6枚1　7枚1　8枚6　9枚2　10枚以上12

d四の2でカードを利用しましたか。

ハイ37　Bイイエ5

e文章にするときカードを何枚使いましたか、

1枚1　2枚1　3枚3　4枚4　5枚2　6枚5　7枚1

8枚1　9枚1　10枚2

5、四の2で七の第一段のキーを使いましたか。

Aハイ12　Bイイエ22　C参考とした8

6、旧い自分は書きやすかったですか。

Aハイ7　Bイイエ34

7、五で、七の第二段のキーを利用しましたか。

Aハイ11　Bイイエ19　C参考とした12

8、六で、カードを何枚作りましたか。

2枚4　3枚4　4枚5　5枚1　6枚1

9、六の2で、七の第三段のキーを利用しましたか。

Aハイ12　Bイイエ14　C参考とした12

10.六の3で、カードは作業に有益でしたか。

Aハイ11　Bヤヤハイ18　Cイイエ11

11.あなたの感想は、この手引きがあることによってよく書き表わせましたか。

Aハイ6　Bヤヤハイ29　Cイイエ3

12.一般的にいって、あなたは作文が好きですか。

Aハイ2　Bヤヤハイ11　Cイイエ30

（A、女2　B男4女7　C男19女11）

13.今回の作文の手引きの長所は、

a自分のいいたいことがよくつかめた。

b段階・順序など型にはめるのでやりやすかった。

c主題が一貫してよかった。

dまとめ方、書き方がわかった。

e各段落のキーが役立った。

f書き出しがわかった。

gカードがあったので混乱しなかった。

hよみが深まった

i構成、段落わけがうまくいった。

jその他

14.今回の作文の手引きの短所は、

a旧い自分が書きにくかった。

bカードがうまく使えなかった。

c方向が制約されて型にはまる。

dその他

2　7　9　12　　5　2　2　2　2　3　4　4　9　10

15.その他

a考えていることがことばにならない。　6

b考えたことがつかみにくい。　2

九

授業をふりかえって。

①型の提示や、中心文のヒントなどの手だては、ある程度有効であったと考えられる。

②その反面、生徒の自由な発想の展開を抑えたり、新鮮な感動がうすれたりする欠点を持っている。

③このような授業は、くりかえし行わない方が良いであろう。しかし、部分的に取りたてて練習するのはさしつかえないであろう。

④カードの利用法など、別途の技術の導入はもっと早い段階で練習しておくほうがよかった。

作文の嫌いな生徒は、その大部分の理由が「うまく書けない」「自分が表現できない」「まとまらない」「ことばがでてこない」というところにある。「いいたいことが表現できない」という苦しみをどう切り開いていくかが今後も課題として残るであろう。

そうして、さらに深くて大きな課題は、「本当に書きたいこと（本音）が書けない」というまじめな悩みである。自分の中の批評家が、本音を吐かせない。この点についても、手だてが必要である。

（昭和54年1月10日稿）

（広島県立安古市高校教諭）